

自慢するような話ではないが「糞」という漢字を覚えた時のことをいまでも思い出せる。小学校の低学年だったと思う。僕にそれを教えたのは、父の田舎から数年に何度か前ぶれもなく現れて数日から数ヶ月間我が家の住人になっていた人だ。以前は国鉄に勤めていたらしいが、当時は仕事をしている様子はなかった。

しかし、国鉄時代の習慣でか、退職後も文字通り風来坊の風体ながら当然のごとく敬礼で改札を通り田舎から東京まで無銭乗車してきたり、酔っ払ったまま頼みもされない小学生の交通整理をして車に轢かれたりしていた。字がともうまく、いつも「風来坊」という特大サイズの名刺を持ち歩いていた。

彼は僕にこう教えた。

「米が異なって糞だ。いいか、コメはひとの体を通すとクソになる。だから『こめ(米)だ(田)ども(共)くそ(糞)』と書く。だけど反対に糞は田の肥やしになり米になる。ただし、米も腹に溜まって糞になるように、糞も肥だめに溜めて初めて肥やしになる。だから、米だども糞だが、糞だども米なのだ。ウム、字はこうして覚えんといかん」

「ムムッ、米が糞で、糞が米か……。ソーク、なんと意味が深いものであるのだ。これこそが智恵だ」などと子供が思うわけもないが、字を覚えた以上に子供心にテツガクするような気分くらいにはなっていたかもしれない。

ともかくもそれで、画数の多い「糞」の字を一回で覚えてしまい、なぜか自分の頭がよくなったような気がしていた。それはまた、「学ぶ」ことを実感した初

めての体験であつたような気もする。

大げさにいえば、この「糞」の字で文字というものに意味があることを知り、「コメダドモクソ」が何事かを「考える」という初めての体験だったのかもしれない。いま考えてみると、農業から学んできた「循環の論理」に僕がこだわるのも、三つ子の魂というやつかもしれない。しかし、以来「コメダドモクソ、コメダドモクソ、コメダドモクソ……」と呪文のように呟く癖が付く親によく叱られた。

ところで、いまになってオジサンのことを思い出したのは、あの時オジサンが教えてくれた「米は食べるだけで糞になるが、糞を米にするには手間がかかる」というのが、現代の日本や日本人の姿勢のものを言い表しているようにも思えるからだ。わが国はすでに喉元まで廃棄物(糞)の山に埋もれてしまっている。しかし、われわれはそれをまだ十分に自覚できていない。これまで食糧やさまざまな工業原料としてエネルギーについて

は、その調達コストが安くなることを優先にして考えてきたが、その廃棄物処理をどうするかの方がこれからは問題にならざるを得ないのだ。

「なければ何でも輸入すればよい」あるいは「農業はなくても輸入すれば何とかなる」といった考え方は、「われわれは食べればうんこをする存在であり、その始末をしない限りいつか糞詰りになる」ということを無視しているだけ。

かつて、少なくともほとんどの有機物

については、農業が生産に結びつく形で最終処理を行なってきた。ところがいま

や比較的処理が容易な食品産業等の残渣にしても、廃棄物の量とその処理コストはますます増大し、最終処分場を探すのに困る事態になり始めている。核廃棄物をはじめとする幾つかの危険物はその最終処理方法が見出せないでいるほどだ。

この後、日本は食糧や原料やエネルギーを海外に依存するだけでなく、日本人の生活や生産にともなう廃棄物、それも食品加工残渣のようなものまでの処理すら海外に依存するといった状況に陥ろうとしているのである。もしもそれが技術的に、また「輸出商品」となり得たとしても、やがて世界の批判を受けることにもなるであろう。

「物質循環業」としての農業

かつて都市から出るし尿や食品加工業などの廃棄物は、農業生産を高める有効な肥料源であった。農家であれば、自家のし尿ばかりでなく非農家のし尿を生産物と交換してでも集めた時代があった。ところが現在では農業の内部ですら、一方ではそれを必要としながら、他方で家畜糞尿があふれ畜産公害などといわれている。もつといえば、食品加工業から排出される廃棄物を、高い加工・流通コストをかけて袋詰めされた堆肥として農家が買う時代になっている。これは、考えようによっては、農家がペットフードで豚を飼っているということではないだろう。農業がそんなお金をかけて成り立つものだろうか。

こういって「それではお前が堆肥作りをしてみる」、「都市の不始末をまたしても農業に押しつける」と読者に怒られそう。さらに、堆肥やし尿が使われなくなったのはその処理の手間やコストが引合わないからだともいわれそう。

その通りである。別に「日本の廃棄物処理問題解決のために農業よ奮起せよ!」とか「農業なら堆肥を使い」とか号令をかけるつもりはない。

そうではなく、農業の「作物生産」という側面はかりに目を取られずに、有機物を無理のない形で自然界に還元していく「物質循環」という、「農業」のもう一つの側面がもつ可能性についても考えてもよいのではないかとこのことだ。むしろ「物質循環業」としての農業の側面が、新しい「ビジネス」のテーマとして検討できる時代がいよいよ始まるうとしているのではないか。



「江刺しの稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見ている。「江刺しの稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい

第16回 本誌編集長 昆吉則